

今後も自然体で

山本太郎

(長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野)

わたしがハイチに暮らし始めたのは、2003年の六月のことでした。ポルトープランスの高台の小さなアパートで。遅れてやってきた妻と、お腹の中にいる息子を迎えに、空港まで車で行ったことを覚えています。少し大きくなったお腹を抱えて到着した妻が、空港の建物から顔を覗かせては、ポーターに囲まれ、建物の中に隠れ、また建物から顔を覗かせる。その愛らしい姿に微笑みました。それから12年が過ぎました。そのときお腹にいた息子も11歳になります。時が過ぎるのは早いものです。

「ハイチ友の会」は、それよりも八年早い1995年に活動を開始されたと言えます。当時慶応大学三年生だった小澤幸子さんらによって始められました。ハイチが軍事政権から民政復帰した直後のことです。以降、西半球で最も貧しい国の人々のために、活動を続けられ、今年20年を迎えられたとのこと。「継続は力なり」ではありませんが、20年の継続はまさに、多くの実りをもたらしたことと思います。

その間、ハイチは2004年のクーデター、2010年の大地震とコレラ流行と多くの試練を迎えました。その都度、ハイチの現場にあったのが「ハイチ友の会」でした。震災から五年経過しましたが、復興は途上です。これからが、支援の正念場だと思います。自然体で、そう、ハイチ友の会も一緒に歩んできた須藤シスターのように、自然体で今後ともご活躍ください。

